

東京都荒川区。町屋の駅から、昔ながらの商店がポツポツと立ち並ぶ通りを歩くこと十分。

右手に「エビスマ」というレトロ調の看板に出会います。看板の奥をのぞくと、銀色に輝く丸裸の缶が所狭しと積み上げられています。それとは対照的に缶の山の横に「TIN CAN GALLERY」と名付けられた、おしゃれな缶を飾った小さな展示室があります。

ここは、創業七十年の老舗の缶屋。そこに「ケンちゃん」こと、少年のような笑顔をした山岸健一社長(四七)がいます。

今から十三年前、三十四歳の彼はエビスマの一社員でした。ある日突然、六十歳になる父親から言われました。「明日から、会社の経営をすべてお前に任せろ」と。

## 「缶回」ある 会社はうまく

▶▶ 2



「エビスマ」の小さな展示室「TIN CAN GALLERY」

「こんなに簡単にもうけている俺ってスゴイ奴だ」  
心の声がどんどん大きくなっていきました。そして、外車に乗って得意先を回り、接待を受け……。そんな優雅な日々が続きました。

彼は、悩みに悩んだ揚げ句、三つの会社を整理することにしました。

そのことを先代の父親に伝えたところ、父親は彼にこういいました。

「お前が失敗することはわかってた。でもあえて止めなかったのは、転んでみないとその痛みはわからないからだ」

「父親が残してくれた、この缶事業に集中するんだ」  
そう決心した彼は、社員の前で謝ることを決意しました。

△筆者プロフィール▽ 泉一也(いずみかずや) 1997年京都大学工学部卒。システム構築会社に就職後、2002年コンサルティング会社のコーチ・エイ入社。04年ウィルビジョン設立。東京中小企業家同友会 青年部幹事。生涯学習開発財団認定マスターコーチ。

大企業から中小企業まで業績向上を目的にしたコーチングによる組織活性化を請け負う。「個を活性化させてチームの力を引き出す」をテーマに50社以上の企業に研修、コンサルティングを行っている。

# 失敗の後がすべての始まり

翌日から社長にはなったものの、山岸さんを見る社員の目は冷やかでした。

「甘ちゃんのボンボンと思われたくない、社長として周りに認めてもらおうんだ」  
躍りになって、彼は働きま

した。

3つの会社興す

社長になって四年目。自ら始めた缶雑貨の仕事も軌道に乗れ始めたころ、社長としての自分を思いきり表現できる

チャンスをめぐり会いまし

た。

知り合いからの誘いなどもあり、倉庫業、雑貨の問屋、備長炭の卸業と3つの会社を次々に興しました。

当初は三社の業績は好調でした。周りからは自然と「社長、社長」ともてはやされるようになりました。

三社の事業が順調だったのもつかの間、備長炭事業の最大の取引先が倒産し、三千万円の負債を抱えることになりました。

実はこの時、他の二つの事業も赤字に陥り、その補填のために銀行から借り入れを繰り返すといった悪循環に入っていました。

1億円の負債

三社で一億円の負債という現実、そして、父親の温かく厳しい言葉を、受け、彼はようやく目が覚めました。

背丈以上のことをしていた自分の姿、「すべてを動かしているのは俺だ」という高慢な姿が、はっきりと見えま

た。

「お前が失敗することはわかってた。でもあえて止めなかったのは、転んでみないとその痛みはわからないからだ」

「みなさんのおかげで、私は仕事ができることがよくわかった。これからは一心不乱に本業に精を出します。みなさん、私に力を貸してください」。声を振り絞って言葉にしました。

頭を下げることで、これが山岸さんにとっての社長としての本当のスタートになりました。

あの失敗から五年、最初の三年間は試行錯誤を繰り返しましたが、どれもうまくいきませんでした。

しかし、ここ二年はいいリズムが会社に流れています。それは社員が、山岸さんの思いに対して、応えよう、協力

しようとする姿勢が現れたからです。三年間、地道にあきらめず会社を良くしようと取り組んできた姿勢が、ついに社員の心を動かしました。

社内は、社員の軽やかな声

が飛び交っています。会社に一歩入ると、「いらっしやいませ」とさわやかなあいさつが迎えてくれます。そして、実践重視の若手リーダーが、日に日に頭角を現しています。

「俺が俺がの、我」を捨て

て、社員が主役の会社を作りたい。そのために私のすることとは、社員が心地よく仕事ができる、成果を出せる環境をつくること。今は、業績を社員にオープンにして、売れる仕組みづくりを確立することです」

山岸社長が顔を真っ赤にし

ながら満面の笑みでそう断言する言葉の裏には、失敗をスタートに始まったこの五年間のドラマがズシリと感じられるのです。

「俺が俺がの、我」を捨て

るのです。